日清ニット
ウールのガラ紡ジャケット地

「これぞ、中小企業の生きる道」というのに相応しいのが、今回紹介する「日清ニット」（林清太郎代表 尾西市東五城字寺廓14－1）。個人経営ではあるが、扱い素材はいずれも高度な意匠力とハイレベルな設備、技術を駆使した“オンリーワン”である。そうした素材群に今回、ガラ紡の技術を使ったウールのジャケット地を開発、特化素材の枠を広げた。

日清ニットは本来経編みのメーカー。イタリア製の「カクテルローニ」という設備3台とコンピュータ経編機1台を保有している。これで婦人服向けのジャケット地を生産している。イタリア製による経編みのジャケット地は「尾州産地では当社のみ」と林清太郎代表は自信を持って語る。カクテルローニは意匠糸使いの変り物で、顧客から高い評価を得ている。

コンピュータ経編機は日清ニットが特許を持つ改造編機で、林代表によると主な特徴は①ニットの原則である糸の絡みをニードル（針）ではなく、パイプの絡みで作り出す（手編み調）②生地の表に太番手が出て、裏のゲージは細かくなる（二重織り調）―という。8年前に経編機では林代表がはじめてコンピュータ化した“優れ物”だ。

この販売価格はメートル当り2,500～2,600円（ニッター出し値）というからかなりの高額である。林代表は「零細企業が価格競争に巻き込まれる商品を作っていては生きていけない。真似されない技術とベターゾーンを狙う商品づくりが生き残りの道」と語る。

その日清ニットがこのほど開発したのが、ガラ紡によるウールの紳士服向けのジャケット地だ。4年前の平成12年3月27日、林代表はかねてから計画していたわが国固有の紡績機・ガラ紡を導入した。本来綿を素材とするガラ紡にウールで挑戦しようというわけだ。導入したのは5台、1,600錘。ニットの生地メーカーが紡績に乗り出すのも異例だが、うち1台はコンピュータ制御に改造した。ガラ紡をコンピュータ制御し、糸のスラブを自在に作りだすのも異例だ。

ガラ紡の難しさは、管に詰め込む綿づくりだ。「残糸をミキサーで綿にするなど苦労した」結果、撚り子といわれる設備をウール用に改造して、'04～'05年秋冬物からの商品化にこぎつけた。生産能力はいずれも月産で糸が1,000㌔グラム、生地が50反（1反＝40㍍）となっている。

商品は目付け400㌘前後で、原料は紡毛70%・梳毛30%を経糸、緯糸に使うが、コンピュータ機ではウールとシルクや麻との混紡を生産する。経編機の技術を応用して複数の意匠糸を編機で編み、ガラ紡糸と組み合わせて経緯1対1で製織し、タンブラー仕上げでカスリ調に仕上げた芸術技素材も開発した。「日本古来の良さ、手作り感覚を前面に押し出し、世界に打って出たい」と林代表の夢は膨らむ。林代表を良く知る人は「林さんは、商品へのこだわりと、なんでもコンピュータ化する尾州のエジソン」と評している。